

私は酒、たばこ、コーヒ、ギャブルはやらない。理由は至って簡単だ。酒は20歳になったら誰でも飲めるものだ！なんて勝手に思い込んでいた（良い子は真似しないでくださいいね）。そんな若気の至りでボトル半分くらいを約1時間で飲んでしまったことがある。

やったこともないのに、意気込んで通はストリートだ！とテレビのCMを信じたのがバカだった。「ほー、ウイスキーはこんな味なんだ」と感動するも15分もしないで体が熱くなり頭がクラクラ状態に陥り、意識を失い2日間寝込んでしまった。あれ以来お酒がおいしいと思う勘違いは自分の記憶から消滅した。ただ、全く口にしない訳ではない。

酒は人と農作物が交わってできた神からのギフト

お酒は百薬の長といわれるし、年を重ねると味覚が変わると聞いたので、意味のないチャレンジを年に一度くらいやる。しかしビールを口にするとやはり「あゝ苦っ！」というも記憶の味覚が蘇る。よくこんなマズいものにお金を出して飲む気になるな〜と考えてしまう。本来苦いものは体に良い訳がないので、太古の昔に経験したDNAの記憶が舌を通して危険を教

えてくれるのだ（と信じている）。

ただ記憶をたどれば20歳くらいの時に、1800円の大枚を払って買ったドイツの白ワインをグラスで一杯くらい飲んで、「これがヨーロッパの味か、なんか良いな〜」と感じてしまったことがあった。

後から調べてみるとポトルは茶色だった。その特徴はライン川流域で作られているものだ。甘口だったのか、辛口だったのかは覚えていないが、奥行きがありマツタリした味わいに感動したが、所詮アルコールは体が受け付けないので飲んでも数年に一度くらいで、グラスに2杯飲むと寝込んでしまう。

経験したことはないがライン川下りをする両岸にお城があり、今日では王様亡き後は観光名所になっているそうだ。なんでもドイツのワインは大昔ローマ軍が…野生のブドウで…ゲルマン民族大移動で…アブラムシで全滅の危機があり…世界に名だたるワインが誕生した。などと歴史に思いを馳せながら飲む

私を酔わせてどうするの？

Vol.118



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

のもよし、酔っぱらうために飲むのもよしといったところだろうか。

そういえば毎冬になると父が解体された豚を半頭買って来ていた。小学生だった私は今日も豚肉か〜と思いつつ、違う味覚を探していた。ある時、テレビの放送で肉にビールを漬けると美味しくなると言っていた。ビールはなかったの

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

一晚漬けてみた。良い！肉の味わいに深みが出る。たぶん安いワインで十分イケると思うので、皆さんも試してみてもいいかがだろうか。

世界にはいろいろなお酒がある。ドイツはワイン、スコットランドはウイスキー、アメリカはバーボン、ロシアのウォッカ、日本は酒、味は異なるが人と農作物が交わってできた神からのギフトであることに間違いはない。ただドイツ語でギフトは毒を意味するようだ。

これを書いていて、ふと思ったのだが、これらのお酒は土地の封建制度の賜物なのか、つまり地主、小作関係がはつきりしていたので誕生したのではないだろうか？という仮定に至った。ではその封建制度が無くなった現在、新しいお酒は存在するのだろうか？

ありました。アメリカ資本主義が作ったバイオエタノールです。コーンから作ったエタノールは人が飲むことが可能であるとアメリカ・オハイオ州の工場責任者が話していた。バイオエタノールはその後ガソリンなどに混ぜられ、地域の農業生産者の利益だけではなく、地域の繁栄をもたらししていることはみなさんもご存じだろう。まっ、組み換えを否定する未来のない方たちには関係のない話ですが。

「私は飲めません」は「多少は飲めます」

若い時の話だが、ナンパするとき「飲みに行こう」が定番のセリフだ。だが自分はその言葉を言えなかった。当然である。飲めないのだからウソついでどうするんだ。ただあるときに気が付いた。ほとんどの女性にいえることだが「私は飲めません」は「多少は飲めます」。「飲めません」は「ザル」で、お酒好きですは「酒乱」であることは間違いない。

そんな時、ススキノに当時あったロ○○ルというお店によく出入りしていた。そこは全国チェーンでポトルキープできるシステムになっていた。ただ本場のポトルでなく、量そのものはコンピューター管理され、ポトルに再度注がれて提供されるものだった。誰と行ったのかは定かではないが、今でもしつかりと覚えていたことだった。

ポトルを持ってきてくれたウエイトレスから書類を渡され、自分の住所、電話番号を書いた。店にとって顧客管理に使うのである。個人情報管理などない時代で、私も気にしないで記入して渡した。書いていた間にそのウエイトレスと雑談をした。なんと長沼町のお隣町出身だったことを覚えていた。私はジュー

人の命のはかなさ

スを飲み、一緒に来た子はウイスキーを飲んで楽しい時間を過ごした。

1週間くらいして自宅にハガキが届いた。あの隣町に住むウエイトレスのA子からだった。時は1987年10月22日木曜日でお昼前の11時頃だった。書かれていたことは今でも覚えている。過日ご来店いただきありがとうございます。またのご来店を心よりお待ち申し上げます、A子と直筆だった。ハガキを受け取り、その書かれた文章を読んだのは当時、中学生だった妹である。なぜ平日の昼間に妹がいたのかは忘れたが、妹からは「へーお兄ちゃん、こんな店行くんだ」とからかわれたが、釈明することなくゴミ箱に投げた（北海道弁で捨てる）。

12時10分頃NHKの放送は全国版から北海道・札幌支局版に変わっていた。その時にニュース速報が入った。乗員3名が乗ったセスナ機が札幌丘珠から離陸後、墜落した。当時は実名報道だった。○○航空株式会社機長○○、25歳、整備士○○、○○町○○里、A子、○歳……

あれ？どこかで聞いたことのある名前だな。まさかと思い先ほどのハガキをゴミ箱から取った。名前は

……同じだった。

妹と目が合い、二人でビックリ仰天した。そのハガキは確か机の引き出しにしまっておいた。死者からの手紙になるのだろうか。こういう手紙を忌み嫌う方もいるのだから、私はそのように全く感じなかった。

その一年後には自分はセスナを操縦していて、たまたま当時のセスナ機を整備した人たちから当時の話を聞いた。A子は初めてセスナ機に乗ることになったそうだ。搭乗者は同じススキノのお店に行き、彼女と意気投合したらしい。

その後、同じセスナP型で同じ気象条件で飛ぶことがある。私は飛ぶことを楽しむが、3人の無念さを感じる。人は見かけで判断してはいけない例がここにある。どうもこの顔で、

この体つきだと焼酎ビン片手にへべレケに飲むのだからとよく言われる。そんな繊細な私は「今度飲みましょう！」と誘われるのが一番辛い。キャワイイ娘からのお誘いなら「行こうかな」とスケベ心満載で行くかもしれないが、棺桶に片足突っ込んだオヤジ相手では意気消沈してしまう。あなたがお酒を飲むのはご自分の自由であるが、父から下戸のDNAを受け継いだスケベオヤジには酷なことだ。